

<出題の意図>

問題文は内田樹（2007）『下流志向ー学ばない子どもたち 働かない若者たちー』（講談社）の一節を採用し、外国人留学生及び中国引揚者等子女として、本学経済学部の講義に対応可能な基礎的日本語能力、文章理解力、論理的思考力を問うことを目的として出題した。具体的には読解力、漢字能力、比喩的表現の理解、日本語運用力など基本的な能力を見た。

この問題文は、大学での勉学を進めていくうえで学ぶ者の基本的な心構えはどうあるべきかについて、重要な問題提示をしており、大学で学ぼうとする学生にとって「学ぶ」ということの原点を再認識することができると考え、採用した。問題文は「何の役に立つのか？」という問いを立てる昨今の風潮を批判している。

大学教育においては、文章や話の表面上の意味を理解するだけでなく、理解した内容を再構成して論理を組立て、それを論述する、あるいは自らの課題の探求に利用するといった能力が必要とされる。あるテーマに対して、細かな論理を積み重ねて結論を導く、あるいは説得力を与えるという構成は、日本語の文章では頻繁に見られる。その論理を読み解くことが内容を理解する鍵であり、理解した内容を正しい日本語で説明することが出題の意図であった。このため、設問2から設問4は、筆者が展開する論理に対する理解度を問うた。設問5は、勉強に対する心構えを記述すればよいので、比較的初歩的な日本語作文能力でも正答を得ることができる。

<解答の傾向と採点の基準>

全体的に、解答には中国語母語話者に見られる特有の誤用、例えば助詞の間違いや脱用、自・他動詞の混同、中国語漢語（簡体字）の使用、訓読みの送り仮名の間違いが見られた。また、純粹な漢字の間違い（「行動」を「行働」、「一分一秒」を「一分一妙」、「有意義」を「有益義」「有意議」、「定義」を「定議」、「専門」を「專問」等）が、日本人学生と同様に留学生にも増えていた。さらに、「いけません」「できません」「ありません」のような「～ません」形が、「いけないです」「できないです」「あまりないです」のような「～ないです」形に置き換わる現象が表れており、現代日本語の趨勢の一端が垣間見られた。

（設問1）

「頻繁：ひんばん」は中国語の発音から「びんはん」等が多く見られ、撥音「ん」の後のパ行の表記がほとんどできていなかった。「苦痛：くつう」も「くづう、くづう」等、有声と無声の対立が正確でないものが多かった。「無邪気：むじゃき」は語彙として習得されていない受験者が多いようである。「満足：まんぞく」はほぼ全員が正解であった。「価値：かち」は「かちち」と、日本語無声音を中国語有気音で発音していることが表記の誤りとして見られた。

（設問2）

答えは文章の意図が理解されていないことから、解答にならないものが多く、特に設問2と設問3に顕著であった。しかし、少ないながら正解もあった。解答の傾向として、下線部の前後からの引用

が多く見られた。また、設問『面白くて役に立ちそうな』授業が、なぜ否定的に述べられているのか」の「なぜ」に対して、上手く説明できた解答はあまり多くなかった。

(設問 3)

設問 2 と同様に、下線部周辺から引用された解答が多かった。字数制限の 100 字を無理に満たそうとして「測れないものを測ろうとする子供に（そのことを）教えてやるべきだ」というような筆者の主張に追随したものが見られた。

(設問 4)

設問 2 から設問 4 のうちで、設問 4 が最も正解率が高かった。「自分のすることは当然（未来の）自分の責任だ」という考え方が、良くも悪くも身近な問題として捉えられているように思われた。

(設問 5)

大部分の答案は勉強の目的が明確に書けていたが、論理の正確さが不十分のまま展開されており、それについては減点した。採点のポイントは、勉強する理由と自分の意見を明確に述べているかどうかである。解答の傾向として、「何のために勉強するのか」に対して、「自分のため、家族のため」、あるいは「国のために役立つ人材となること」を挙げたものが多かった。少数ながら「勉強したいから、知らないことがあるから、何も知らないでいることが嫌だから」というものも見られた。また、「筆者の意見に同意する（あるいは賛成する）」で結ばれている解答が散見され、日本留学試験の記述問題対策をしてきたことはわかるが、設問に合うように私論を展開させられるレベルに日本語能力が達していないことが認められた。

(設問 6)

受験者がいなかったため、コメントは特になし。